

## 戦前における柳田国男著作の受容

— 櫻井徳太郎文庫所蔵書籍を事例として —

The Reception of Works by Yanagita Kunio before World War II

矢野 敬 一

(YANO Keiichi)

(平成十九年十月一日受理)

### はじめに

昭和戦前期にあって柳田国男の著作はどのように受容されていたのか、あるいはされていなかったのか。この問題を戦前、師範学校を経て高等教育機関に一学生として所属していた人物の蔵書と聞き取りを通して、当時の読書をめぐる社会的背景も踏まえて論じるのが本稿の課題である。<sup>1)</sup> 言葉を変えれば柳田国男の言説それ自体ではなく、その流通と受容の実態を明らかにすることに本稿の目的意識はある。柳田論の数は膨大なものとなるが、柳田の言説がどの程度広範に流布、受容されていたのかという点については、多くの場合、不問に付されてきた。あらかじめ本稿の結論を先取りすれば、少なくとも昭和戦前期の時点でいえば、高等教育機関での柳田の著作の受容は限定的なものだったということになる。

本論文で対象とするのは戦後の民俗学界をリードし続けてきた櫻井徳太郎氏（以下、敬称略）と、その蔵書である。扱う理由はまず櫻井が柳

田の最晩年の弟子であり、戦後、東京教育大学で日本史学講座所属ではあれ、民俗学者として活躍した経歴を持つという点。次いで櫻井は戦前、新潟県高田師範学校から東京高等師範学校、東京文理科大学に進学しているという点。当時の柳田が教員層を民俗学運動の担い手として想定していたこと、さらに和歌森太郎以下、東京高等師範学校、東京文理科大学出身者で民俗学的な視点を取り入れた研究者が多数輩出したことも勘案すると、櫻井の経歴は柳田の著作の受容という観点からいって、一つのモデルケースたりえるものと考えられる。さらにその蔵書はごく最近入手されたものを除き、すべてが東京都板橋区公文書館に櫻井徳太郎文庫として所蔵されていて、書誌的調査が可能であり本稿の主題に適うという点である。

櫻井が一九三一年に高田師範学校に入学してから一九四四年に東京文理科大学を卒業するまでの一四年間は、柳田が精力的に単著や編著を公刊し、自らの学を大きく展開していった時期に該当する。『日本民俗学大系』掲載の「柳田国男著作目録」を見ると、一九三一年の『明治大正史世相編』『日本農民史』の刊行を皮切りに一九四四年の『火の昔』に

至るまで、各種民俗語彙集も含めてこの間に上梓された数は五七冊の多きに達する。また柳田が民間伝承の会を組織化し、日本民俗学講習会を開催していくばかりでなく、教育界でいえば郷土教育への関心が高揚していったのも、櫻井の在学期間中の出来事だった。戦前の柳田の著作の受容状況を問うという点で、櫻井の経歴は本稿の目的にふさわしい。

板橋区公文書館の櫻井徳太郎文庫は、二〇〇〇年に櫻井が寄贈した書籍、雑誌と若干のカセットテープ他から構成されており、その所蔵総数は三万二五八点にも及ぶ。学術書が約一万二千点、学術雑誌が約一万七千点、各種報告書が約二千点といった内訳となっている。この内、筆者が実際に手にとって奥付で確認した結果、戦前に刊行された単行本および文庫本・新書は一五六七点を数えた。

もちろん、このすべてが戦前に入手されたものではない。しかし東京高等師範学校に合格するしばらく前から、櫻井は入手した書籍に全部ではないにせよ署名するようになり、その習慣は東京文理科大学入学後、若干の期間まで続く。こうした入手時期が特定できる署名入りのものは東京高等師範学校在学中では単行本で三七冊、文庫・新書本では二四冊を、東京文理科大学在学中ではそれぞれ二一冊、三七冊を数える。戦時下にあつて空襲で消失した書籍も多くあつたが、現在残された書籍を手がかりとして、聞き取りと合わせて当時の読書状況を復元することが可能である。

ここで本稿に関わる櫻井の経歴の概略を記しておきたい。櫻井は一九一七年、新潟県北魚沼郡川口村（現川口町）に生れた。一九三一年に新潟県高田師範学校本科第一部に入学し、専攻科を経た後、東京高等師範学校を受験して合格。短期現役兵を務めた後、一九三八年に文科第四部（地歴専攻）に入学した。その卒業は戦時下にあつたため、繰上げとなり一九四一年一二月となった。翌四二年には東京高等師範学校臨時補習

科に入学し修了の後、四月から東京文理科大学史学科の国史学専攻に入学する。その卒業は一九四四年の九月のことである。ちなみに櫻井が東京高等師範学校に入学した年度の『東京文理科大学／東京高等師範学校一覽昭和十三年度』の在学者一覽を見ておこう。そこには高等師範の第四学年に千葉徳爾、東京文理科大学の国史学第一年に萩原龍夫、東洋史学第一年に直江広治、国史学第三年に和歌森太郎といったように、後年民俗学会で重きをなした者の名が何名となく読み取れる。

## 一 師範学校での教育と柳田の著作

新潟県高田師範学校（以下、高田師範と略記）の本科第一部に櫻井が入学したのは一九三一年。かつて尋常科の卒業を間近に、女子児童がぼつりぼつりと教室に姿を見せなくなっていたことを、櫻井は強く印象にとどめる。折しも大恐慌時代で、卒業式を待たずに製糸工場に働き出ざるをえない事情がそこにはあつた。村からそうした事態をなくしたい、非文化的なものに浸っているような生活ではいけないと奮起して目指したのが、教師の道である。

高田師範に入学したのは、郷土教育への関心が高揚を見せつつあつた時期と重なつた。一九三〇、三一年度の両年にわたつて文部省は郷土研究施設費を各師範学校に交付し、三一年の師範学校規程地理科に「地方研究」を導入することによって郷土教育運動が始まつたとされる。その後の動向は伊藤純郎の研究によれば一九三七年を画期として、大きく変質していく。文部省による郷土研究施設費の交付の最後の年度は一九三五年度であり、郷土教育に関する講習会も一九三七年度以降の開催はない。この年、師範学校教授要目が改正されたことをもって、文部省の郷土教育運動は観念的精神的な「日本精神涵養運動」に変質したと伊藤は

## 櫻井徳太郎文庫蔵書入手時期別一覧

## 新潟県高田師範学校時代(単行本)

入手日付	刊行年	書名	著者名	備考(裏表紙見返しなどへの書き込み)
1935年6月	1934	西洋教育史概説	吉田熊次	昭和十年六月二十四日 櫻井徳太郎
1935年10月	1928	大日本史講座江戸時代史(上)	栗田元次	昭和拾年拾月求之 櫻井徳太郎
同上	1930	大日本史講座国史総合年表	滋賀貞	昭和拾年拾月 櫻井
同上	1930	大日本史講座国史研究法	大類伸他	昭和拾年拾月 櫻井
1937年1月	1936	社会思想家評伝	河合榮治郎	T.SAKURAI -2597.1.17-A t TAKADA

## 新潟県高田師範学校時代(文庫・新書本)

1936年3月	1936	読史余論	新井白石	入学の歡びに満ちて 2596.3.1 at Takada (岩波文庫)
1937年2月	1936	世界人類史物語上巻・下巻	コフマン	東京高師文四 櫻井/2597.2.3 T.Sakurai at Takada (岩波文庫)
1937年2月	1936	歴史とは何ぞや	ベルンハイム	東京高師文四 櫻井徳太郎 2597.2.3 T.Sakurai at Takada (岩波文庫)
1937年3月	1931	増鏡		2597.3.6 地久節の佳辰に T.Sakurai at Takada(岩波文庫)

## 東京高等師範学校時代(単行本)

1938年9月	1937	哲学の根本問題	西田幾多郎	昭和十三年九月九日 東師文四 櫻井徳太郎
1938年9月	1937	日本文化史序説	西田直二郎	昭和十三年九月二十七日 東京高師文四 櫻井徳太郎
1938年9月	1938	日本経済史概要	土屋喬雄	昭和十三年九月二十七日 東京高師文四 櫻井徳太郎
1941年2月	1939	義経伝黒板勝美	黒板勝美	一六・二・一五 東京高師文四ノ三 櫻井徳太郎
1941年2月	1940	紋章の研究	沼田頼輔	一六・二・一五 東京高師文四ノ三 櫻井徳太郎
1941年2月	1940	増訂日本思想史研究	村岡典嗣	昭和十六年二月廿五日 東京高師文四ノ三 櫻井徳太郎
1941年2月	1940	日本社会史	滝川政次郎	昭和一六・二・一七 東京高師文四ノ三 櫻井徳太郎
1941年2月	1940	古事記新講	次田潤	昭和十六・二・十八 東京高師文四ノ三 櫻井徳太郎
1941年4月	1940	国史上の社会問題	三浦周行	昭和十六年四月一日 第二十四回誕辰ヲ記念トシテ 東京高等師範学校 櫻井徳太郎
1941年4月	1941	日本国民生活の発達	内田銀蔵	昭和十六年四月一日 東京高等師範学校 櫻井徳太郎
1941年4月	1941	日本における武家政治の歴史	新見吉治	昭和十六年四月四日 東京高等師範学校 櫻井徳太郎
1941年9月	1941	日本建築史講話	武蔵高等学校	一六・九・二七東京高等師範学校文科第四部 櫻井徳太郎
	1931	史学名著解題	千代田謙他	昭和十六年明治節の佳辰に 東京高等師範学校 櫻井徳太郎
1941年12月	1940	歴史下巻	ヘロドトス	一九四一・十二・十五
1942年3月	1941	日本美術史研究	浜田耕作	昭和十七年三月四日 東京高等師範学校 櫻井徳太郎
	1929	各国経済史	野村兼太郎他	東京高師文四 櫻井徳太郎
	1935	郷土生活の研究法	柳田国男	東京高師 文四 櫻井徳太郎
	1936	日本文化史図録	木代修一	東京高師文四 櫻井
	1937	支那思想史	武内義雄	東京高師文四 櫻井
	1937	風土	和辻哲郎	東京高師 文科四部 櫻井徳太郎
	1938	西洋史新講	大類伸	東京高師文四 櫻井徳太郎
	1938	日本文化史概説	村岡典嗣	東京高師文四 櫻井徳太郎
	1939	帝都	喜田貞吉	東京高師地歴科 櫻井徳太郎
	1939	独逸理想主義	ヴント	東京高師文四 櫻井
	1939	実践哲学の基本問題	由良哲次	東京高師文四ノ三 櫻井
	1940	日本美術史図録改訂版	源豊宗	東京高等師範学校 櫻井徳太郎
	1940	新社会学要綱	松本潤一郎	東京高師 文四 櫻井徳太郎
	1940	世界地理第十一卷欧州総論		東京高師文四 櫻井徳太郎
	1940	世界地理第十二卷南欧・東欧		東京高師 櫻井徳太郎
	1940	日本歴史概説下巻	川上多助	東京高等師範学校文四ノ四 櫻井徳太郎
	1940	歴史的世界	高坂正顕	東京高師文四ノ三 櫻井徳太郎
	1941	大和古寺	井上政次	東京高等師範学校文四 櫻井徳太郎
	1941	日本茶道史	西堀一三	東京高等師範学校 櫻井徳太郎
	1941	世界地理第一巻日本		東京高師文四 櫻井徳太郎
	1941	世界地理第二巻満州		東京高師文四 櫻井徳太郎
	1941	大和史蹟案内	奈良県	東京高等師範学校文科第四部 櫻井徳太郎
	1941	歴史の論理	権俊雄	東京高師文四 櫻井徳太郎

## 東京高等師範学校時代(文庫・新書本)

入手日付	刊行年	書名	著者名	備考(裏表紙見返しなどへの書き込み)
1937年9月	1936	ケーベル博士随筆集	ケーベル	T.Sakurai 22th September in 1937 (岩波文庫)
1938年8月	1931	古代社会(下)	モルガン	August.3.1938 T.Sakurai at Nagaoka (改造文庫)
1938年8月	1938	ソクラテスに就て	ヴィンデルバント	August.3.2598 T.Sakurai at Nagaoka 東京高師文四 櫻井 (岩波文庫)
1938年8月	1931	古語拾遺		Aug. 11. 1938 T. Sakurai at Nagaoka (岩波文庫)
1938年8月	1938	東洋思想十六講	高須芳次郎	Tokyo Higher Normal School Literature Aug. 11. 1938 T. Sakurai at Nagaoka (新潮文庫)
1938年8月	1938	歎異抄		東京高師文四 櫻井徳太郎 August 11. 1938 T. Sakurai at Nagaoka (岩波文庫)
1938年8月	1938	気候と文明	ハンチントン	Tokyo Higher Normal School Aug. 12. 1938 T. Sakurai at Nagaoka (岩波文庫)
1938年9月	1938	正法眼蔵随聞記		東京高師文四 櫻井徳太郎 23th of Sep. 2598 at Tokyo (岩波文庫)
1938年9月	1934	日蓮上人文抄		24th of Sep. 2598 T. Sakurai (岩波文庫)
1939年1月	1937	人間的余りに人間の上巻	ニーチェ	Tokyo Higher Normal School Bun 4 class T. Sakurai 14.1.2 (岩波文庫)
1939年1月	1938	ニーチェのツァラツストラ 解釈並びに批評	阿部次郎	14.1.2 at Nagaoka 東京高師文四 櫻井徳太郎 (新潮文庫)
1939年1月	1938	支那思想と日本	津田左右吉	一四・一・二〇 (岩波新書)
1939年3月	1933	古代社会(上)	モルガン	March. 22th. 1939 Tokyo Higher Normal School. T. Sakurai (改造文庫)
1940年10月	1940	伝説	柳田国男	一五・十・一 (岩波新書)
1940年10月	1939	日本資本主義史上の指導者たち	土屋喬雄	一五・十・四 (岩波新書)
	1936	枕草子上巻		東京高等師範学校文科第四部 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1936	訓読日本書紀上巻		東京高師文科第四部 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1936	愚管抄		東京高師文四 櫻井 (雑誌古典研究附録)
	1937	道草	夏目漱石	Tokyo Higher Normal School T. Sakurai (岩波文庫)
	1937	平家物語上巻・下巻		東京高師文四 櫻井 (岩波文庫)
	1937	訓読日本書紀中巻		東京高師文科第四部 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1939	日本国家思想	肥後和男	東京高師文四 櫻井徳太郎 (弘文堂教養文庫)
	1940	ドイツ国民に告ぐ	フィヒテ	東京高師 櫻井徳太郎 (岩波文庫)

## 東京文科大学時代(単行本)

1942年	1941	増補国史大系第十九巻		昭和十七年 櫻井
1942年4月	1941	本居宣長	村岡典嗣	昭和十七年四月東京文科大学国史学 櫻井
1943年3月	1943	仏教思想研究	宇井伯寿	昭和十八年三月十五日 櫻井徳太郎
1943年9月	1925	史料綜覧巻一		昭和十八年九月十二日
1943年9月	1925	史料綜覧巻二		昭和十八年九月十二日
1943年9月	1926	史料綜覧巻三		昭和十八年九月十二日
1943年9月	1927	史料綜覧巻四		昭和十八年九月十二日
1943年9月	1928	史料綜覧巻五		昭和十八年九月十二日
1943年9月	1930	史料綜覧巻六		昭和十八年九月十二日
1943年9月	1932	史料綜覧巻七		昭和十八年九月十二日
1943年9月	1933	史料綜覧巻八		昭和十八年九月十二日
1943年9月	1936	史料綜覧巻九		昭和十八年九月十二日
1943年9月	1938	史料綜覧巻十		昭和十八年九月十二日
1944年3月	1944	世界史講座(二)		昭和十九年三月/櫻井徳太郎
1944年8月	1944	宗祖としての道元禪師	後藤即応	昭和十九年八月三十一日 東京文理大 櫻井徳太郎
1944年9月	1941	定本国民座右銘	日本文学報国会	秋山様ヨリ頂ク 昭和十九年九月十八日
1944年9月	1944	芸術と道德	西田幾多郎	秋山様ヨリ頂ク 昭和十九年九月十八日
	1933	岩波講座日本歴史第二回		文理大 国史学 櫻井徳太郎
	1935	岩波講座日本歴史第十六回		東京文理大 国史学 櫻井徳太郎
	1935	岩波講座日本歴史第十七回		昭和十九年二月五日 於鷺宮
	1936	沙石集(説教学全書第八編)		文理大 国史学 櫻井徳太郎

## 東京文理科大学時代(文庫・新書本)

入手日付	刊行	書名	著者名	備考(裏表紙見返しなどへの書き込み)
1943年6月	1942	見聞談叢	伊藤梅宇	一八・六・十 (岩波文庫)
1943年7月	1943	柳子新論	山縣大武	18 7 23 at Osaka (岩波文庫)
1943年8月	1938	言語地理学	ドーザ	昭和十八年八月十八日 櫻井徳太郎(富山房百科文庫)
1943年8月	1938	明治史資料大隈伯昔日譚	円城寺清	昭和十八年八月十八日 櫻井徳太郎(富山房百科文庫)
1943年8月	1939	敵討	平出絢二郎	昭和十八年八月十八日 櫻井徳太郎(富山房百科文庫)
1943年8月	1938	講述大乘起信論	望月信亮	昭和十八年八月十八日 櫻井徳太郎(富山房百科文庫)
1943年8月	1940	鴨長明全集上		昭和十八年八月十八日 櫻井徳太郎(富山房百科文庫)
1943年8月	1943	正法眼蔵下巻		東京文理科大学国史学 櫻井徳太郎 18.9.25 (岩波文庫)
1943年10月	1941	古事記		楢木野学兄より 十八年十月八日 櫻井徳太郎(岩波文庫)
1944年8月	1944	古事記伝(四)	本居宣長	昭和十九年八月十五日 第二師範横山君より(岩波文庫)
1944年9月	1944	源平盛衰記(一)		秋山様ヨリ頂ク 昭和十九年九月十八日 (岩波文庫)
1944年9月	1944	海国兵談		秋山様ヨリ頂ク 昭和十九年九月十八日 (岩波文庫)
1944年9月	1944	元和本下学集		秋山様ヨリ頂ク 昭和十九年九月十八日 (岩波文庫)
1944年9月	1944	名将言行録(五)		秋山様ヨリ頂ク 昭和十九年九月十八日 (岩波文庫)
1944年9月	1944	名将言行録(六)		秋山様ヨリ頂ク 昭和十九年九月十八日 (岩波文庫)
1944年9月	1944	伝心法要		秋山様ヨリ頂ク 昭和十九年九月十八日 (岩波文庫)
	1926	御堂関白記下巻		文理大 櫻井徳太郎 (日本古典全集第一巻)
	1941	シェイクスピアと独逸精神 上巻・下巻	グンドルフ	東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1941	政治問答	ランケ	東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1941	上宮聖徳法王帝説		東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1941	宗教生活の原初形態上巻	デュルケム	東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1941	新論	会沢安	東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1942	葉隠下		東京文理科大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1942	日本遊戯史	酒井欣	東京文理大 櫻井徳太郎 (弘文堂教養文庫)
	1942	政治史の課題	中山治一	東京文理大 櫻井徳太郎 (弘文堂教養文庫)
	1942	北京年中行事	清敦崇	東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1942	鉄眼禪師	赤松晋明	東京文理大 櫻井徳太郎 (弘文堂教養文庫)
	1942	宗教生活の原初形態下巻	デュルケム	東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1942	往生要集		東京文理大 櫻井 (岩波文庫)
	1942	道元禪師清規		東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1943	古事記伝(一)	本居宣長	東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1943	葉隠上		東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1943	学問のすすめ	福沢諭吉	東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1943	うひ山ふみ/鈴屋問答録	本居宣長	東京文理大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)
	1943	日本思想に於ける 否定の論理の発達	家永三郎	東京文理大 櫻井徳太郎 (弘文堂教養文庫)
	1943	科学と方法	ポアンカレ	東京文理科大 櫻井徳太郎 (岩波文庫)

結論付けた〔伊藤 一九九八 四一三〕。全国の師範学校が刊行した郷土研究の文献目録を作成した宮原兎一の研究を見ても、掲載された全三九点の内、一九三二年から三七年までに刊行されたものは二八点と大半を占め、伊藤の研究を傍証する〔宮原 一九六七 二七〕。櫻井が高田師範に在学していた時期は、まさに全国的な郷土教育運動の展開と軌を一にするものだった。この運動に対して「民間側にもすでに受け入れ基盤が醸成されており、なかでも柳田国男が果たした役割は大きかった」という評価がなされている〔平山 一九九四 四九六〕。改めて柳田の著作が郷土教育運動の中でどのように受容されていたのかを、高田師範の場合も含めてここで扱うことにしたい。

新潟県内での郷土教育運動の動向はどのようなものだったのか。新潟県教育会による雑誌『越佐教育』を見ると、新潟県教育会主催の初の「本県郷土教育研究会」は一九三二年の一月一五、一六の両日、新潟師範学校を会場として開催された（同年九月号「彙報」）。その講演と研究発表をもとにした記事で、ほぼ「郷土教育特集号」とでもいうべき体裁となったのが、この年の一月号だ。東京帝国大学の入沢宗寿の講演録が冒頭に置かれ、新潟師範学校の津川正美「郷土教育に於ける郷土生活関係事実の重要性に就いて」が続く。他に五本の研究報告等も掲載されており、合計九本もの郷土教育関係の文章がこの号に並んだ。翌三三年の『越佐教育』一月号の彙報欄では「本県第二回郷土教育研究会」という見出しで、三島郡関原尋常高等小学校を会場とした当日の概要を紹介する。講演者の一人は文部省嘱託の小田内通敏。小田内は柳田国男と同じ一八七五年生まれで、地理学者。一九一〇年から新渡戸稲造のもとで始まった郷土会の第一回から参加したメンバーの一人だった<sup>4</sup>。後述するように、郷土教育運動で大きな推進役を果たした人物である。

『越佐教育』を見ると、新潟県教育会が主催する郷土教育研究会は第

三回が一九三四年に直江津農商学校で（同年一月号「彙報」）、第四回が三五年に中條小学校を会場として実施された（同年一月号「彙報」）。しかし同誌を見る限り、これを最後に郷土教育研究会についての記事はない。その理由は不明だが、第三回での講演題目が「農村更正の根本問題に就て」、第四回が「純日本精神と郷土教育」とあるように、次第に研究会でのテーマが郷土教育それ自体から離れていったことが読み取れる。同誌掲載の記事にしても以後、題名に「郷土教育」の文字が入ったものは目立って少なくなり、一九三七年一月月号掲載の「郷土教育への静視」が最後となった。

『越佐教育』が対象とするのは、主として初等教育界の動向である。ではその教員を養成する師範学校での郷土教育指導はどうだったのか。櫻井が高田師範に入学した一九三二年は、一月に「師範学校規定改正」が施行され、二月にその「教授要目」が示されている。その審議と施策の成立過程については外池智の研究にくわしいが、郷土教育運動という観点から重要なのは、地理に「地方研究」が導入されたことである。その導入は師範学校生徒が卒業後、教職に就いた際、一般的専門的知識の伝達ばかりでなく、その地に即した教育を実現することを目的としたものだった。その結果、師範学校本科第一部の最終学年である第五学年で「地方研究」が週一時間、課されることになる（外池 二〇〇四 八八）。その前年の三〇年には各師範学校に対して、文部省から「郷土研究施設費」が交付されていた。師範学校での郷土教育への取り組みは、時期的には一九三〇年代のほぼ一〇年間に集中していたことになる。

合計一九校の師範学校を対象として郷土教育の実施形態を調べた前島康男によれば、その形態は大きく四分類できるといふ。第一に資料の収集や見学などを中心とした「直感」的形態、第二に調査や研究を中心とした研究的形態、第三に「郷土実習」を中心とする実践的形態、第四に

地域住民を対象とした啓蒙的形態である。第二の調査・研究的形態は、各師範学校で重視されたものだった。その内容は正規のカリキュラムや「郷土教育研究会」での教師と生徒との共同調査・研究、および夏・冬季休暇中の生徒による調査・研究である（前島 一九八二 七九）。

前島は高田師範を調査対象としなかったので言及はないが、同校でも当時の動向と無縁ではありえなかった。特に重要なのが高田地理研究会の存在である。一九三二年に会は設立され、合わせて機関誌として『郷土・地理研究』もこの年に創刊された。創刊号には会の設立趣旨が掲載されている。その内容を見ると、近年「教育の郷土化郷土研究の必要が強く叫ばれる」と冒頭にあり、「郷土教育は郷土地理の研究に依つて完成されると云つて過言でない」と、地理学的重要性が謳われる。そして「初等教育に於ける郷土研究は郷土地理が中枢となり当事者は郷土研究が必要事となる」と会設立の目的が示された（今村 一九三二 五〇六）。その会則を見ても「本会は郷土の地域研究を遂行し会員相互間にその資料を交換し以て郷土教育の完成を期し併せて地理教育上の諸問題を研究す」とあり、郷土教育の推進に活動の重点があったことがわかる。会の名称はその後「新潟県郷土研究会」に変更されて、誌名も一九三四年から『郷土研究』となつて歴史学も含めたより広い分野の論考を掲載するようになった。

研究会の会員層やその数はどのようなものだったのか。一九三三年五月刊行の『郷土・地理研究』第三号末尾には「会員名簿」が掲載されている。それを見ると、「会長」は高田師範の校長、「顧問」は東京高等師範学校助教授二名や高田市長他がその任に当たっており、合計六名を数える。「賛助員」に続いて教員からなる「会員」の記載となっており、市と郡単位別に所属先と氏名が配列されている。その所属を見ると、「小千谷中学校」「高田女学校」「高田図書館」所属の三名以外はすべて

尋常高等小学校で、先の三名も含めた教員の会員総数は一五九名。さらに「師範専攻科之部」「一部五甲」等の区分が名簿には設けられていて、高田師範学校生徒でも本科第一部であれば五年と四年、第二部ならば一、二年がこの研究会に所属していたことがわかる。その総数は一一〇名。第一部の五年での会員数が三三名を数えるので、上級学年になると自動的に入会扱いになつていたのであろう。

高田地理研究会の設立趣旨を書いたのは、高田師範学校で地理を担当していた今村義孝。東京高等師範を卒業して赴任し、熱心かつ先端的な授業を展開した今村に櫻井は心酔した。しかしこうした「地理研究」「郷土研究」を謳つた研究会が存在したにもかかわらず、櫻井の記憶では在学中に地域調査に従事したことはない。それは全寮制で軍隊式の教育を師範学校が行つていたことによる、と櫻井は言う。生徒全員が寄宿舎生活のため、高田市の市街に調査に出ようとしても許可を得なければならず、手続きは煩雑となる。研究会に出席した記憶があるとはいへ、拘束されて窒息したような生活というのが師範学校時代だった。その回想だけに限らず、当時の師範学校の寮生活全般は旧制高校とは違つて自治があまり認められておらず、万事が許可制で厳しい外出制限が課されたものだったことは確かである（明石 一九八一 四八七）。師範学校生徒にも郷土教育を及ぼしてその推進を図ろうとする方向性があった一方で、さまざまな制約も大きかったことがここからはうかがえよう。櫻井は地理学への関心を深めつつも、だからといって実地の調査をすることができなくてもなく、その力は陸上競技部でのスポーツに向けられることになった。

その後、櫻井は一九三六年に高田師範を卒業し、そのまま専攻科に入學する。今村の影響もあつて高田師範に在学中、東京帝国大学の辻村太郎著『新考地形学』や、東京文理科大学の田中啓爾著『地理学論文集』

を読んで地理学への興味をいっそう、深めたことがその年譜には記されている。とはいえこの二冊は現在、櫻井徳太郎文庫に所蔵されてはいない。国史学に進進すると決めた櫻井が東京文理科大学に進学した後、同じ高田師範出身で東京高等師範に在学中だった後輩、伊倉退蔵に地理学関係の書籍、雑誌の一切を渡したからだ。戦後、伊倉は横浜国立大学で教鞭をとることになる。

すでに述べたように戦争によって灰燼に帰した書籍も多く、高田師範在学中に入手したことが明らかなのは、五年生になった一九三五年時点の記載がある五冊に限られる。その内、書き込み時期のいちばん早いものは吉田熊次『西洋教育史概説』で、その裏表紙の見返しには「昭和十年六月二十四日／櫻井徳太郎」とある。櫻井徳太郎文庫の所蔵図書ではこれを起点として以後、入手した書籍に署名をする習慣が始まったことがわかる。当時の師範学校教授要目を見ると、「教育」では第五学年で「近世教育史」が課せられており、その一項として「近世欧米教育ノ概要」が位置付けられているので、吉田の著作は参考図書として入手されたのかもしれない。また教授要目の「歴史」を見ると「国史」は第三学年以後第五学年まで組まれているので、表1にある『大日本史講座』の三冊もそれに対応したものであつたらう。

櫻井が高田師範在学中の五年間は、柳田の著作でいえば『明治大正史世相篇』以下、『日本農民史』といった代表的作品、あるいは『民間伝承論』『郷土生活の研究法』といった自らの学の方法論に正面から言及した作品を上梓していた時期となる。しかし当時、櫻井はこうした著作にふれることはなかった。その背景には郷土教育運動が高揚していた時期にもかかわらず、そこに及ぼす柳田の影響は限られていたという事情があった。

それを示す一例として、高田師範図書館での柳田の著作所蔵状況を取

り上げたい。高田師範の蔵書は戦後、新潟大学附属図書館高田分校分館に、そして現在は新潟大学附属図書館の書架「集密高田」に移管されている。師範学校蔵書のうち、どの程度が新潟大学に移管されたかは未確認のことであるが、ある程度までの蔵書の状況は把握できよう。新潟大学附属図書館の「集密高田」に配架された蔵書のうち、「新潟県高田師範学校図書印」および「新潟県高田師範学校校友会図書部印」が押印された柳田の著作は、その刊行順に以下の通りとなる。<sup>8)</sup>

「新潟県高田師範学校図書印」を押印の著作

一九三四年 『民間伝承論』 共立社

「新潟県高田師範学校校友会図書部印」を押印の著作

一九三三年 『秋風帖』 梓書房（一九三三年発行の再刷）

一九三六年 『地名の研究』 古今書院

本稿冒頭で述べたように、櫻井が高田師範入学後、東京文理科大学卒業までの間、一九三一年から四四年にかけて刊行された柳田の編著は、五七冊にも上る。しかしながら高田師範関係で所蔵されていたその著作の数は、わずかに三冊を数えるに過ぎない。

高田地理研究会の機関誌を見ても、柳田の影響は希薄だといわねばならない。そこに掲載された各種論考、調査報告の多くが地理学的方法によるものである。それでも会名を新潟県郷土研究会とし、機関誌名も『郷土研究』に変更した一九三四年以降、歴史学的方法からの記事も掲載されるようになった。しかし柳田が唱えた民間伝承論を主軸に据えた内容のものは、管見しうる最後の号、第三卷第二号（一九三七年）にわずかに一つ、見出せるにとどまる。「史料」という項の「新潟県に於ける民俗学的調査」がそれで、調査地を三地点選んでの報告となった。調査項目は「特殊年中行事」「婚姻」「誕生」「葬儀」「住家」「言語遊戯」「民間芸術」で、合計七ページにとどまる分量にとどまった。



新潟県教育会主催の郷土研究会の講演に講師として招かれた小田内通敏は、すでに述べたように柳田と同年輩で郷土会のメンバーの一人でもあった。地理学者の小田内は文部省嘱託という立場ではあれ、一九三二年以来なされた郷土教育関係施策に関して、その企画と実施に全面的に関わっていた。小田内はそこで一貫して中心的役割を担っていたのだ（外池 二〇〇四 四六一）。郷土教育で求められていたことが主に地理学的内容だったことは、小田内の関与からも首肯できよう。しかし柳田の場合はどうであったのか。郷土会で柳田や小田内と席を共にした同時代人、牧口常三郎の著作『教授の統合中心としての郷土科研究』の一節は、その点で重要な証言となるものである。牧口は柳田について「郷土研究の元祖であり、大先達である」と、高く評価する。しかし「惜しいかな地方においても郷土研究の篤志家には殆んど周知のことであるが、教育界では、まったく畠違いとして、おそらくはあまり知られぬようではある」と述べた（牧口 一九六五 四一〇）。櫻井は高田師範在学中、柳田の著作に触れる機会はなかったという。一方で柳田の郷土研究が高く評価されていたとはいえ、当時の状況を勘案すればそれは無理からぬことであった。柳田の著作を櫻井が始めて入手したのは、東京高等師範学校に進学して程なくのこととなる。

## 二 東京高等師範学校在学と柳田の著作への接触

一九三七年に高田師範学校専攻科を卒業した櫻井は、東京高等師範学校（以下、東京高師と略記）に合格。文部省普通学務局の『昭和十二年四月現在師範学校二関スル調査』によれば、この年高田師範の専攻科を卒業したものは総勢三〇名。卒業後の進路は「上級学校二入りタルモノ」一名、すなわち櫻井を除いてすべてが小学校教員である。当時、高等師

範学校への進学は師範学校卒業生にとって、極めて狭き門だったことがうかがえる。櫻井は合格後、すぐに入学せずにその年四月から八月までの間、短期現役兵として高田市の歩兵第三十連隊に入営。除隊後は九月一日付で高田市の南本町尋常小学校訓導として、翌年三月末までその任にあたった。東京高師の文科第四部（地歴専攻）に入学したのは、一九三八年四月。第四部の第一学年学生数は櫻井も入れて三四名だった。

ここでは櫻井が東京高師に籍を置いている間、どのような読書をしており柳田の著作はその読書生活でどう位置付けられていたのかについて論じる。櫻井徳太郎文庫所蔵の柳田国男『郷土生活の研究法』所収「我々郷土研究の沿革」の末尾に、「一三・一〇・一三」と読了の日付が鉛筆書きされていることから、櫻井が同書を手通しして目を通したのは入学してまだ半年ほどの時点だったことがわかる。本格的に柳田の著作を読むようになったのは東京文理科大学進学後のこととはいえ、東京高師入学後ほどなくして手にしていたこともたしかである。

まず当時の各種学校在学していた学生生徒の読書の実態について、言及したい。文部省は一九三八年一月に「学校生徒の生活をば広く各方面より観察し之等を比較総合して其の全般的な動向を明かにせん」とを目的として、全国の大学、高等学校、専門学校等一二八校を対象として調査を行った。その回答者は六万三千名を越えており、東京高師を例に取ると在籍者一一一〇名のうち九二五名と、約八三パーセントの生徒が回答を寄せている。調査の実施時期は折しも櫻井が東京高師に入学生した年度のことであった。

調査結果は『学生生徒生活調査』と題して上下二分冊で文部省教学局から刊行されており、当時の東京高師生徒の読書生活を中心とした事項について参照したい。読書は主に勉学と趣味娯楽との両面に関連する行為である。そこでまず前者に関する質問として、「講義外の一日の平均

勉強時間」での調査結果を見たい。それによると東京高師の場合、最も多いのが「2・3時間」で全体の三三・〇パーセント（小数点第二位四捨五入、以下同様）で、次いで「1・2時間」が二六・七パーセント、「3・4時間」が二〇・三パーセントといった順になる。毎日二時間から四時間の間、勉強時間を取る生徒が全体の過半数を占めていたことが、この結果から読み取れる。この傾向は同時に調査対象となった官公私立高等学校生徒の場合とほぼ変わらない。

一方、趣味娯楽での読書の位置付けはどのようなものだったのか。この調査では東京高師と広島高等師範学校を一括して「高師」としている。その結果を取り上げる。「趣味娯楽」を問う質問で回答数の多いもの三つを上位から順に挙げると映画、音楽、読書となる。それぞれ総回答数の一六・二パーセント、一三・六パーセント、一三・〇パーセントを占め、以下順位はスポーツ、散歩、旅行およびハイキングと続く。こうした傾向は官公私立高等学校でもほぼ同様で、こちらは映画、読書、音楽といったように二位と三位との順が入れ替わるだけである。当時の高等師範学校生徒にとって、読書は主要な趣味娯楽の一つだったことが以上の結果からはわかる。

当時の旧制高等学校文化について、教養主義の波及という観点から主に読書傾向を通じて論じたのが筒井清忠である。筒井は教養主義者を「夏目漱石とその門下生、ケーベル門下の哲学者（阿部次郎・和辻哲郎らは両者にまたがる）、西田幾多郎ら京都学派、白樺派の文学者、倉田百三、河合栄治郎ら」と規定し、さらにゲーテ、トルストイ、アンドレ・ジイドなどの海外作家も準教養主義として扱った（筒井 一九九五六一）。そして高等学校生徒を対象とした各種の読書調査をもとに、教養主義文化の推移を位置付けた。それによれば大正末期から昭和初頭にかけて、マルクス主義とモダニズムを中心としたいくつかの潮流が見ら

れた。しかしその後、昭和一〇年代の本格的な戦争の時代の訪れと共に、旧制高校生文化においてはマルクス主義が退潮する一方で、教養主義の復権という流れへと変化する（筒井 一九九五 七二―七五）。

筒井が示した読書傾向は、先の『学生生徒生活調査』でも該当する。この調査で対応する質問項目「最近読みて感銘を受けた書籍」のうち、「官公私立高校」の項を見ると上位三位は当時のベストセラーが占めていたものの、それ以下十位までは全て教養主義の作品が並んでいる。一位と三位が火野葦平による戦記文学『麦と兵隊』『土と兵隊』で、二位が島木健作による転向小説『生活の探求』である。しかし四位『愛と認識の出發』、五位『出家とその弟子』と倉田百三の著作が並び、さらに六位阿部次郎『三太郎の日記』、七位に西田幾多郎『善の研究』以下、武者小路実篤、河合栄治郎と教養主義に位置付けられる著者の作品が続いていく。

こうした傾向は、高等師範学校にも共通していたのだろうか。この調査では東京と広島、二つの高等師範の結果が一括されており、そのデータを見ると上位四点までは、順位は若干異なるものの作品自体は共通する。しかし一位から十位までのうち、半数が高等学校で回答のあった作品とは異なったものが現れており、目を引く。七位の徳富蘇峰『吉田松陰』、八位の河村幹雄『名も無き民の心』、九位の西晋一郎『東洋倫理』、十位の杉浦重剛『倫理御進講草案』といった書籍すべてが、高等学校で上位三〇位以内には見受けられない。『名も無き民の心』の著者は地質学者で九州帝国大学教授。独自の立場から教育を実践すべく斯道塾を設立するものの四五歳で亡くなった。その遺稿集が本書である。また西晋一郎は東洋倫理にもとづく国体論や国民道徳論を展開した倫理学者である。杉浦も教育者として高名な人物だった。高等師範学校全般での読書傾向は教養主義的な色合いと同時に、中等教員養成を目的とする学校

の性格をも色濃く反映したものとなっていたのである。

当時の学生生徒の読書生活では、柳田国男の著作はどのように位置付けられていたのだろうか。『学生生徒生活調査』の調査結果では、学校の種別に「感銘を受けた書籍」を回答数の多い順にそれぞれ五五点ずつ提示している。それを見ると「高師」「官公私立高校」だけではなく、「帝大」他全部で九つに区分された各種学校のいずれにも柳田の著作は見当たらない。その著作が教養主義の脈絡とは異質であったということも含めて、当時の学生生徒の関心領域に柳田の著作が入る余地は小さかったとみなさざるを得ない。実際、東京高師入学の年に『郷土生活の研究法』を入手した櫻井だったが、同学年で柳田の著作を読んでいた者は誰もいなかった、と記憶している。

こうした事態は同時にその著作が思想「善導」とも無縁だったことと表裏一体であった。たとえば文部省思想局による『思想善導に関する良書選奨』という冊子がある。奥付はないものの表紙には「昭和十一年三月」と刷られており、時期的には櫻井が高田師範の本科を卒業した時点での刊行となる。序を見ると「思想問題に関し穩健中正なる思想の涵養上、又は学生生徒の指導訓育上の参考となるべき良書を選び」編集したもの、とある。全体が「推薦」「紹介」「選定」に三分され、対象となった点数は重複分も含めて一六五冊を数える。取り上げられた書籍がもっとも多い著者は平泉澄と西晋一郎のそれぞれ五冊で、「思想善導」の意図を強く感じさせる。

しかしその一方で和辻哲郎の著作が四冊、ここで示されているばかりではなく、アカデミズムの立場からの著作の紹介もあったことは見落とすではなるまい。ここでの選定がイデオロギー一辺倒ではなく、ある程度バランスを考えてなされていたことを示している。櫻井が進学する東京高師、東京文理科大学関連で言えば、後に警咳に接することとなる

村岡典嗣の『日本思想史研究』『本居宣長』、また強く影響を受けることになる恩師肥後和男の師、西田直二郎の『日本文化史序説』が選定対象となっている。しかし全体で七三名を数える著者名の一覧には、柳田国男の名前はない。学生生徒が自主的に選んで読む、あるいは文部省が「思想善導」目的で推奨する著作の著者としての柳田の位置は、低いものだったといわざるを得ない。

こうした状況の中で、東京高師に在学していた櫻井はどのような書籍に接していたのだろうか。櫻井の回想ではその頃、河合栄治郎の『学生の教養』がベストセラーになっており、旧制高等学校に限らず教養を第一に考える風潮が広く支配的だったという。特定の専門分野に最初から取り組むのではなく、その根になるような広い教養を追及することが重視されたのだった。主に「東京高師文四／櫻井徳太郎」と裏表紙の見返しに署名のある書籍を、ふたたび表1に戻ってみることにしたい。櫻井自身の言葉を裏打ちするように、筒井清忠が規定する教養主義者の書籍が一覧からは見出せる。単行本ではまず和辻哲郎『風土』、西田幾多郎『哲学の根本問題』がある。文庫本・新書では、東京高師に合格した年の九月に入手された『ケーベル博士隨筆集』（岩波文庫）や、また阿部次郎『ニイチエのツアラッストラ解釈並びに批評』（新潮文庫）が該当する。櫻井の幅広い関心の所在は、ヴィンデルバント『ソクラテスに就て』（岩波文庫）、波多野精一『宗教哲学』、由良哲次『実践哲学の基本問題』、沼田頼輔『紋章の研究』といった書名からも読み取れよう。その一方、マルクス主義関連のものは皆無である。筒井が指摘するような当時のマルクス主義の退潮と教養主義の復権という動向が、櫻井の読書傾向にも端的に反映されている。

高田師範在籍時、次第に地理学に関心を寄せるようになり東京高師でより深く学びたいと希望した櫻井だったが、いざ入学すると授業が期待

していた水準に程遠く失望せざるを得なかったという。その一方、東京文理科大学助教授で東京高師教授を兼任し、「歴史」を担当していた肥後和男の授業に櫻井は魅了されていた。後述するように肥後は京都帝国大学で独自の文化史学を打ち立てた西田直二郎門下で、自ら宮座を調査研究するといったように、民俗学的な観点も方法に取り入れた歴史学者である。たとえばスサノオノミコトは山の神であるという肥後の神話理解は、皇国史観とはまったく異質で非常に開明的かつ科学的なものとして櫻井の目に映じた。何かと束縛が多く皇国史観中心の高田師範とは正反対である。東京高師に満ちた自由な雰囲気象徴するものとして、櫻井は肥後の授業を受け止めた。

入学後、専攻を地理にするか歴史にするか悩んだ櫻井だったが、蔵書一覧ではその関心が歴史学に強く傾斜していたことが読み取れる。東京高師あるいは東京文理科大学で教鞭をとっていた歴史家の著作を見ると、肥後和男のものでは『古代伝承研究』『日本国家思想』がある。他にも櫻井が入学した一九三八年に東京高師の教授となり、櫻井も含めた文四有志に近世画論の購読会を続けた木代修一〔木代 一九六一―七〕の著作では『日本文化史図録』が、東北帝国大学と東京文理科大学の兼任教授だった村岡典嗣の著作では『日本文化史概説』『増訂日本思想史研究』が表1からは見出せる。他方、東京文理科大学で地理学教室に所属していた者の著作は、すでに述べたように東京文理科大学進学後、後輩に全て譲り渡したのだった。櫻井の年譜の一九三八年の項を見ても

「肥後和男『日本神話研究』、西田直二郎『日本文化史序説』、ブルックハルト『イタリアルネッサンス文化』、和辻哲郎『風土』、同『日本倫理思想史』、同『人間の学としての倫理学』などに傾倒する」とあり、和辻と歴史学の著作への強い関心がうかがえる。

そうした問題関心を育む場となったのが、寮生活である。入学してか

ら二年が終わるまで入っていた桐花寮では、大塚史学会の高師部会に所属して国史学を学ぶ者同士が相部屋となっていた。高師部会では史学関係の雑誌から国史関係の論文を選び出し、分野別に配列した文献目録『国史論文要目』を一九三一年に刊行していた。好評に因えて一九三四年に改訂増補版を上梓した後、再び『総合国史論文要目』として編纂事業の運びとなる。同書は刀江書院を版元として一九三九年に発行、六百ページを超える浩瀚な書となった。その「編輯後記」と奥付によると江義男が代表者で、二七名が連なった編纂者の一覧には櫻井の名前も見出せる。櫻井にとって自らが編集に携わった最初の書となった。こうした活動が櫻井の国史学への関心を、よりいっそう高めたことは言うまでもない。

櫻井が東京高師に入学した一九三八年は、出版史上で言えば岩波新書の登場によって新書という新たな形態の書籍が流通するようになった年として、位置付けられる。新書形態に見られる本の小型化と軽装版化は、本に向かう人びとの拡大と出版業者に支えられて、折から世界の出版業界に現出しつつあった「出版革命」を象徴する現象だった。岩波新書はヨーロッパから波及した「出版革命」の、アジアでの最初の受け止めとして登場したのだった〔鹿野 二〇〇六―一六〕。後述するように、岩波新書の最後尾に付された既刊書書目一覧や近刊予告欄に、櫻井は読了したあるいは関心のある題名に数多くの印をつけており、当時の学生生徒同様、櫻井も新書によって教養への多様な欲求を満たしていたことがわかる。

岩波新書の価格は五〇銭均一。これは一万部売ればその価格でいけるといふ原価計算の結果でもあった〔鹿野 二〇〇六―一七〕。当時すでに新書形式で一万部以上の販売を確保できるだけの市場と知的関心を持つ読者層が存在していたことを、この挿話は示す。一方、単行本で櫻

井が入手したものの価格の平均は、表1に掲載した書籍の内、価格が判明する分三五冊から算出したところ、一冊あたり二円五九銭となった。単行本は、概ね新書の五倍程度の価格だったことになる。

こうした書籍を得る前提となる経済面での状況はどのようなものだったのか。東京高師に進学した櫻井の場合、経済的な裏付けの一つとなつたのが給費生としての待遇だった。これは一年生の一学期の成績によつて全学生の二割が選出され、毎月二〇円が支給される制度だった。櫻井が高田師範専攻科を卒業した年、そのまま教職に就いた場合の初任給は専攻科卒の場合、五〇円だったことが『昭和十二年四月現在師範学校二関スル調査』からわかる。その額に比較すると低いとはいえず、寄宿舎での生活費一二、三円を除いた額で櫻井は必要な書籍を求めることができたのだ。さらに学年があがると家庭教師をしてその謝金を生活費にあて、給費生として支給される二〇円はそのまま生活費以外の用途に使えるようになった。仮に毎月一〇円を新刊本購入にあてるとすれば、単行本二冊に新書四冊、文庫本七、八冊程度は求めることができる勘定になる。むろん新刊本ばかりではなく、暇があれば神保町さらに本郷、大塚周辺の古書店をめぐるだったので、入手できた本の数はより一層増す。

すでに述べたように櫻井は『郷土生活の研究法』を東京高師に入学した年に入手しており、同書所収の「我国郷土研究の沿革」末尾を見ると「二三・一〇・一二」と読了の日付が記されている。また東京高師三年生の折、柳田の岩波新書『伝説』が一九四〇年九月に刊行されるや、すぐに入手して読了していたことが、同書の末尾に記された「一五・十・一」という日付からわかる。櫻井は柳田の著作をどのようにして知り、読んだのだろうか。櫻井自らが柳田の著作で強い印象を得たと記憶しているのは、東京文科大学に入学以降のことで『日本の祭』が最初であ

る。にもかかわらずそれ以前に読んでいたとすれば、やはり肥後和男の影響だったのではないか、東京高師時代にはまだ民俗学自体に傾斜していたわけではなかったと櫻井はいう。

肥後和男は一八九九年生まれ、東京高等師範学校文科第一部を卒業後、長野師範学校教諭などを経て京都帝国大学文学部史学科を卒業。一九三二年に東京文科大学講師、その翌年には同校助教兼東京高師教授となる。京都帝国大学では三浦周行、西田直二郎に師事した。古代史の研究において滋賀県大津京址の大規模な学術的発掘調査に従事して、一九二九年に『大津京址の研究』として成果はまとめられた。こうした発掘調査に加え、近江地方の宮座の地域調査を行って一九三八年に『近江に於ける宮座の研究』を上梓している。そのため肥後は「神話の民俗学的解釈の先駆者・歴史考古学者としての学問的地位を確立した」というのが、現在の学史上の評価だ〔芳賀 一九九三 四〕。

肥後が民俗学的な問題意識を持った契機は、主に京都帝国大学の師である西田直二郎の影響からだった。「思へば私が京都の大学で西田直二郎先生の下に国史を学んだ際、先生は文化史の発展を叙せられて人類学、民俗学の進展がこの種の歴史学に大なる寄与をなしたことを説かれ、我国に於いても地方村落の間に残る古き生活を極めたならば、歴史学の発達に大なる貢献となるべきことを論ぜられた。私はその言葉を身に体して農村の習俗を採訪し始めたのである。それは凡そ従来の歴史学とはかけ離れたものであり、何事がそれから得られるか殆ど予測されない程のものであつた。けれども私は何物かがそこから生れ出づるであろうことを考へつゝ、遍歴をつづけた」と、肥後は振り返っている〔肥後 一九三八 一〇〕。肥後も含めて西田の教えを受けていた学生たちは大学の授業の後、金曜日には西田の私邸を訪ね、ヨーロッパ留学中の見聞や文化史学の理論や方法について議論を交わす場を設け、「金曜日」と称して定

例的な集会を開くようにしていたのだった。こうした集いを基盤として一九二七年に「民俗談話会」が誕生し、肥後も有力メンバーの一人となった。その後、一九三〇年に会は「民俗研究会」と改称され、柳田国男との交流も始まるようになる〔蘇理 二〇〇一 三一―三四〕。

西田に影響を受けた肥後の問題意識は東京高師での教育の場面にも反映され、授業中、西田への言及はしばしばあったと櫻井はいう。西田の代表作『日本文化史序説』を櫻井が求めたのは、裏表紙の見返しを見るとう入学して半年ほど「昭和十三年九月二十七日」のことだった。自身、これは徹底的に読んだと回想するように、ページをめくると丹念に線が引かれてあり、また細やかな書き込みが多い。『日本文化史序説』を重視していたのは、肥後だけではなかった。東京文理科大学に設けられた大塚史学会の学会誌『史潮』に掲載された「学内消息欄」を見ると、西田のこの書が当時東京高師、東京文理科大学双方でいかに重視されていたかがうかがえる。櫻井が東京高師の最終学年だった一九四一年の場合、大塚史学会の国史部会では「読書研究会」として三班に分かれて毎週二時間、研究会を開催していたことが報告されている（第十一年第二号）。それによれば「第一班は飯田先輩を中心に西田氏の『日本文化史序説』を」読む、となっており、同じ欄の「高師部会」でも「連続講義 五月六月中毎週水曜日八時限。飯田助教教授を中心に『日本文化史序説』の購読」とある。

とはいえ学生生徒たちの西田への関心がそのまま柳田の著作講読へと接続していかなかったことは、櫻井が『郷土生活の研究』を求めた当時、同学年で柳田の著作を読んでいた者はいなかったという回想からも明らかであろう。東京高師時代に柳田の著作を読んだの印象は薄かったという櫻井が、民俗学の問題関心を抱くに至ったのは哲学者務台理作の影響だったという。東京高師に入學したもの、期待していた地理学の授

業に落胆し途方にくれていた櫻井が目にしたのが、「伝承的文化について」という務台の講演案内の掲示だった。「何とかして新しい道が開けて欲しいとの切なる願いをこめて聴衆の席につくことにした。ところが何とその偶然が、こともあろうに私と民俗学と、そして柳田とを深くつなげる予期せざる機縁となったのである」と後年櫻井は回顧し、「逸はやく基層文化の持つ意味を重視し、それを伝承的文化と銘打って提唱しながら新鮮な文化観を展開」したとして務台を高く評価している〔櫻井 二〇〇二 二二〕。それまで卑下していた「田舎」の非文化的な生活事実が、実は伝承文化として文化形成に非常に大きな意味を持っていたことを務台によって啓蒙されたのだと櫻井はいう。

櫻井が求めた『郷土生活の研究法』の書き込みを見ると、「民俗資料の分類」の「誕生」の項で「aufleben」というものがある。二二九ページ本文中、「トリアゲバアサン、ヒキアゲバアサン」「生れたものを靈魂界から人間の世界に引上げることの意味したのである」に引いた傍線に対応する書き込みである。産婆による人間の世界への靈魂の移行を「引上げる」と形容することに対して、哲学用語によってアナロジカルに理解したのだろうか。東京高師在学中の櫻井は、歴史学だけではなく哲学専攻に進路を変えるか否か悩んだこともあったという。肥後や務台によって民俗学的関心を抱いたにせよ、それはすぐに柳田の著作への関心に結びついたわけではなく、重層する多様な問題意識と複雑に絡み合っていたものだった。

櫻井が三年生のときに刊行されてすぐに目を通した柳田の『伝説』の末尾には、同書も含めた岩波新書の既刊書一覧がページ分、掲載されている。既読あるいは関心のあるものを示す鉛筆によるチェックを見ると、そこにある三五冊のうち実に過半数近くの一六冊に印が付されている。チェックされていないのは『物質と光』『零の発見』といった理系

の書、あるいは『トルキスタンへの旅』『スエズ運河』といった外国地誌系統のものなどで、それ以外の分野には広い関心が及んでいたことがわかる。教養を重視する当時の読書姿勢がここからは端的にうかがえよう。東京高師時代に『伝説』を読んでいたことはたしかだが、それは民俗学的な関心からというより、新書を通じての教養の涵養という脈絡からのものだったと見た方が妥当である。柳田国男は啓蒙家であり、アカデミズムに属する研究者ではないというのが当時の櫻井の認識だったというが、岩波新書末尾の既刊書一覧へのチェックからもそれは首肯されよう。

### 三 東京文理科大学在学と柳田の著作への接触

櫻井は東京高師を一九四一年一月二五日に卒業し、翌年一月に東京高師の臨時補習科に入学、三月に修了。いずれもが戦時措置によるものである。そのまま四月に東京文理科大学（以下、文理大と略記）の史学科国史学専攻に入学。櫻井によれば自身が柳田の著作を読んだと明確に認識しているのは、『日本の祭』が最初だったという。櫻井徳太郎文庫所蔵の同書の奥付を見ると、一九四三年三月一〇日再版発行のもので、刷部数は五千部。その扉には三嶋大社の社印が押印され、「昭和十八年三月廿九日／伊豆三島神社参拝」と鉛筆書きされている。文理大の第一学年を終えた春休みに、この書に触れていたことがここからわかる。

柳田の業績をはじめとする民俗学は、当時の日本史関連の学界でどのように受け止められていたのだろうか。毎年の学界動向を伝えるものとして、日本史関連の若手研究者が集った代々木会が編纂し、年度ごとに刊行された『国史学界』での記述をまず見ることにしたい。一九二九年分から以降、一九三六年分までが管見しえた範囲である。『昭和四年の

国史学界』を見ると、一般史、史学理論、皇室、政治、社会、法制、経済以下、全部で一六の章で構成された目次の一二番目が「民俗」である。翌年の『昭和五年の国史学界』では目次の構成が若干、変えられており史学理論、一般史、宮廷、神祇、政治、社会以下となっており、前年の「皇室」を宮廷と神祇とに二分する章立てとなった。当時の社会状況の反映ではあるが、さらに今ひとつ「民俗」が新たに「民俗学」へと名称変更されていることが目を引く。目次の順番としては後になるものの、「学」としてまがりなりにも民俗学が認知されつつあったことが、この改変からうかがえよう。実際、その動向についての紹介を見ても、こうした事態が確認できる。『昭和四年の国史学界』の「民俗」冒頭は「民間伝承を通じ、民衆主として農民の生活を研究せんとする民俗学は、最近日本に於て目覚しき興隆を遂げた」と、学としての展開に触れた。さらにそこでは「民俗学の日本に於ける真個の創設者とも云ふべき柳田国男氏」として柳田が高く評価されている（代々木会 一九三〇 五一・五二）。

代々木会の同人は一九三二年の時点で一二名。この内、経歴の判明する者一〇名の年齢を見ると、一八九五年生まれの浅野長武が最年長、一九〇五年生まれの筑波藤磨が最年少といったようにほぼ同世代の集まりだった。したがって『昭和四年の国史学界』刊行時点での同人の年齢幅は二〇代半ばから三〇代半ばまでとなり、若手の研究者集団であったことが判明する。さらにその出身校を見ると、民族学を専攻とし慶応大学文学科卒の松本信広を除くと、残りの九名すべてが東京帝国大学文学部国史学科卒である。個々の章の執筆者名は記されていないものの、全体の大まかな見解は共有されていたことだろう。代々木会の同人を構成していたメンバーの経歴から判断して、昭和初期にあって少なくとも若手の研究者の間に限定して言えば、アカデミズムの立場からも民俗学は

独自の学問領域として認知されつつあり、柳田はそこで高く評価されていたことがうかがえよう。<sup>13)</sup>

『国史学界』の「民俗学」の章では、肥後和男への言及も多い。『昭和六年の国史学界』で雑誌『民俗学』掲載の「鞍馬の竹切について」、同誌「山の神としての素戔鳴尊」、「史林」掲載「大物主神について」の三本の執筆論考が紹介されて以降、新進気鋭の研究者として肥後は評価されていく。それはすでに述べたように京都帝国大学で民俗学への関心が高まり、その結果生れた「民俗談話会」がさらに「民俗研究会」「民俗学会」へと拡大発展していく時期と重なるものであった。

さらに肥後とかかわりの深い大塚史学会の高師部会が編纂した国史関係の雑誌論文目録『国史論文要目』でも、民俗学は独立した項目としての扱いを受けている。櫻井も編纂に携わった一九三九年の『総合国史論文要目』では、「一歴史理論」「二国史一般」「三宮廷」「四政治」「五法制」以下、「二九雑載」まで二九の項目立てをとる。ここでは「二一風俗」に引き続き、「二二民俗」として位置付けられた。細目を見ると一般、神話伝説、民間伝承、民間信仰、人種民族、雑載といった内容だ。先の項目の流れは、歴史学での重要度のヒエラルキーを反映するものと見てよい。民俗学は周縁的な位置とはいえ、曲がりなりにも国史学の関連分野とみなされるようになってきたことが、この目録の構成からは読み取れよう。

とはいえ当時の歴史学界全般を見れば、柳田国男の評価は必ずしも高いものではなかったことも否定できない。東京帝国大学文学部国史学科を一九二九年に卒業した中村吉治は、自由主義者として知られた東京帝大の西洋史学者、今井登志喜でさえも柳田に対して「カツパの屁」学者だと述べたことを、民俗学など問題にもされていなかったエピソードとして紹介している。また中村は当時の民俗学の状況について、「伝統的

歴史学の中には、ほとんど影響が及ばなかったかのごとき」といった表現でも形容している（中村 一九八八 一三・三八）。京都帝国大学で民俗学を標榜した研究会が立ち上げられたのは、当時の歴史学界の流れからいえば異例のことだったことになるう。

そうした場で学んだ肥後の立場は、櫻井によれば東大アカデミズムを中心として展開していた文献による実証派に飽き足りないグループの一員であり、また芳賀幸四郎の言葉によれば東大への対抗意識に根ざしたものの、ということになる（櫻井・芳賀他 一九九三 一一六・一二六）。それゆえ肥後を迎えた文理大で、民俗学への関心が高揚していったのは必然だったといわねばなるまい。大塚史学会の学会誌『史潮』の「彙報」欄に「民俗研究会誕生」の記事が掲載されたのは、一九三九年の第九年第四号誌上である。ここでは「科学としての民俗学の理論的検討、探訪踏査の合理的整理、文献史料の民俗学的活用に留意しつ、真の学的根拠を建設すべく努め、以て日本民族の自覚に指針を与ふとの抱負をもつてゐる」と、研究会の目的が謳われた。第一回例会はこの年一月二五日で千葉徳爾、和歌森太郎、肥後和男の三名が研究発表を行ったことが記録されている。『史潮』の「彙報」欄からその後の動向を見ると、翌一九四〇年の第十年第一号に「民俗研究会」と題して、二月三日の第二回例会の報告がある。ここでは直江広治が「椿の民俗学的研究」と題した報告を行ったとある。

とはいえすでに述べたように民俗学を学問とみなすことに、一方で否定的な見解が根強かったこともたしかである。文理大での「民俗研究会誕生」の彙報記事には、「その方法において業績において未だ普く学者の承認を得る所迄達せず、尚ほデイレツタンテイヅム視されてゐることは遺憾の極みである」とあり、当時の雰囲気的一端を伝える。当の文理大の図書館での柳田著作の所蔵状況にも、そうした状況は反映されてい



るのである。『東京文理科大学附属図書館和漢書分類目録』は一九三四年六月に発行されており、当時の蔵書状況を知ることができる。分類法を見ると、「一五類社会」の細目区分に「六風俗及民俗学」という区分があり、まがりなりにも民俗学が分類項目として独立していたことがわかる。しかしこの目録での柳田の著作の位置付けには、微妙なものがあるといわねばならない。「風俗及民俗学」の項目所収の著作、編著は『石神問答』と『郷土会記録』の二冊だけに限られる。一九二九年『都市と農村』が「一般書・叢書」、同年『民謡の今と昔』が「文学・民謡」、一九三〇年『蝸牛考』が「方言」の項目にそれぞれ分類されているといったように、その著作はいくつもの分野に分散して配置されていたのである。目録での扱いからは、独自の分野の専門家ではなく、他分野にまたがる啓蒙家として柳田は遇されていたということになるか。しかもこの五冊が文理大図書館での所蔵の全てであった。蔵書目録発行の前年、一九三八年までに出された柳田の著作数は、『日本民俗学大系』掲載の「柳田国男著作目録」で数えると二七冊。少なくとも文理大の蔵書目録を見る限り、柳田の著作の所蔵数はきわめて限られていたのが実情だった。

文理大で民俗研究会に参加した者たちは、どのような経路で柳田に接近したのだろうか。肥後和男の影響が大きかったことはいうまでもない。柳田と一九三〇年頃から親交を得ていた肥後は、文理大に赴任すると成城の柳田邸に出入りするようになり、一九三三年に初めて和歌森を柳田の私邸に連れて行ったという〔肥後 一九七八 二六一〕。だが肥後の影響だけではなかった。第一回民俗研究会で報告した千葉徳爾は、東京高師の文科第四部在学中の一九三七年、校内で行われた柳田の講演を聞き、強い印象を受ける。その二年後、四年生となった千葉はふたたび柳田の講演を聞き、数日して直江広治と柳田の自宅を訪れて感銘を受け、

すぐさま民間伝承の会に入会したのだった〔千葉 二〇〇六 三一六〕。一方、直江は地理学を学ぶために東京高師に入学し、地理学者佐々木彦一郎の著作を通じて柳田を知った。『山の人生』に強い学問的衝撃を受けて、柳田の著作をむさぼり読むようになったのである。そして民俗学の方法によって中国の民衆生活を研究するため、文理大の東洋史学科に進学したのだった〔北見 一九八二 四〕。

そうした中、文理大に進学した櫻井の読書はどのように実践されていたのだろうか。まず経済的な状況でいえば、財団法人日本育英会からの貸費を受けることができ、その結果、書籍の購入に費やせる金額が東京高師在学時よりも大きく増す。大日本育英会の創立は一九四三年。この年度から奨学生の採用を始め、第一回目の採用決定数は大学生の場合、総数三二六名。毎月の貸費額は大学生では何段階かに分かれ、五〇円から一〇円刻みで九〇円まで五種類あった〔日本育英会 一九六四 三九、二八一〕。櫻井の場合は月額五〇円となり、生活費は家庭教師でまかなえたので貸費額の全てを書籍購入にあてることができたという。『新訂増補国史大系』といった各冊五円の高価な史料集も、予約をして毎月購入することができるようになったのが、文理大での学生時代だった。

文理大在学中になると、東京高師時代のような書籍の裏表紙見返しへの署名は減少していく。櫻井徳太郎文庫蔵書を調べても、署名あるいは入手年月の書き込みで文理大在学中と判明するものは、単行本で二冊、文庫本・新書では三七冊となる。購入したと思われる冊数全体から比較して明らかに少ない。署名の習慣自体、文理大在学中に途絶し、以後、その蔵書に署名の記載を見ることはなくなる。

文庫本・新書での蔵書内容を見ると、国史学専攻ということから古典中心となっている点が東京高師時代と異なる特徴だ。文理大での櫻井の

卒業論文の題目は「報恩思想成立史試論」。蔵書の中には『道元禪師清規』（岩波文庫）、『葉隠』（岩波文庫）、『正法眼蔵』（岩波文庫）他、本文中から卒業論文に関係するキーワードを拾い上げ、その語と該当ページを見返しに書き込んであるものが多々、ある。自ら索引を作成しつつ、研究目的で読書をしてきた姿が浮かび上がってこよう。当時の国史学専攻の学生にとって、安価で古典を数多く所収する文庫本の登場は研究に大きく寄与するものだった。櫻井もその恩恵を受けていたことが、その蔵書からは伝わる。国史関係のものが多くとはいえ、デュルクーム『宗教生活の原始形態』（岩波文庫）やゼエデルブローム『神信仰の生成 宗教の発端に関する研究』（岩波文庫）といったように、宗教事象への関心を示すものもある。逆にこの時期の蔵書では、教養主義的な内容のものがほとんど見当たらなくなっていることが目を引く。大学生として専門分野に邁進しようとする姿勢の一端であろうか。

すでに述べたように櫻井自身が読んだと明確に認識している柳田の著作は、『日本の祭』が最初だった。櫻井徳太郎文庫所蔵の同書を見ると、文理大の第一学年を終えた春休み中の「昭和十八年三月廿九日／伊豆三島神社参拝」と鉛筆書きされている。同書の扉には三嶋大社の社印が、奥付の前のページには「金時茶屋／伊豆菰山／反射炉」「反射炉見学記念」という二つの記念スタンプが押印されている。この金時茶屋のスタンプは、青木敬磨『善導和尚』（弘文堂教養文庫）、フェーブル『大地と人類の進化 歴史への地理学的序論』（岩波文庫）、ゼエデルブローム『神信仰の生成 宗教の発端に関する研究』（岩波文庫）にも押印されているので、この四冊を携えて旅先で読書をしたことがわかる。

一人旅をし、宿で朝早く目覚めると本を読む、そのために旅先に本を欠かさず持参したというのが、当時の習慣だったという。野村典彦は雑誌『旅と伝説』に連載となった柳田の『木思石語』は、「あるく」こと

の啓蒙としての意味合いを持ったと述べる。『旅と伝説』は鉄道旅行が促す「紀行文」の想像力や郷土玩具の蒐集といった「趣味」と、柳田の構築しようとする「学問」とを大きく抱き込んで、さまざま旅を読者に届けていった。しかし戦争の拡大と共に、同誌は廃刊を余儀なくされる（野村 二〇〇六 一一三）。地理学を専攻するために東京高師に入學し、その後文理大で国史学へと専攻を決めた櫻井にしても、ちよつとした旅行は楽しめた。しかし地理学や民俗学的な関心から、すぐさま実地調査を実施できるような状況にはなかったのが戦時下の実情だった。

一九三八年に創元社から『昔話と文学』が創元選書の一冊として刊行されて以来、柳田の著作は創元選書に数多く収められ、手軽に入手できるようにになっていた。『日本の祭り』を読んで以降、櫻井は創元選書所収他の柳田の著作に少しずつ触れるようになっていった。東京高師在学中に入手した『郷土生活の研究法』末尾には「柳田国男著作目録」として『最新産業組合通解』以下、『郷土生活の研究法』まで四一冊の著作が題名、刊行年、出版社名の順に紹介されている。方法論を論じた同書は柳田自身にとって一つの到達点としての意味を持つていたのであろうし、それがゆえに自己の仕事を振り返る意味で目録が付されたものと考えられる。同時に目録は読者があらためて柳田の仕事俯瞰し、自らの読書の便宜を図るために利用できるものでもあった。櫻井にしても目録に掲載された題名の上に赤鉛筆でチェックの印を付けて、読書の目安としていた。印のつけられた著作の点数は一二点を数え、次第に柳田への関心を強めていったことが伝わる。

こうした書き込みに加え、櫻井が入手した『郷土生活の研究法』では裏表紙の見返し部分に白紙が貼付されて、そこに『山村生活の研究』末尾に掲載された「山村生活調査項目」から、全ての項目が三ページにわたって細やかな文字で筆写されている。『山村生活の研究』は当時、入

手難だったこともあり、研究室所蔵のものから書き写したのだろうと櫻井は回想する。実際に自らがこの項目に従って実践する機会は戦時下という状況もあって困難だったにせよ、柳田が主導した調査への関心の高さがここからは読み取れよう。櫻井が所持した『郷土生活の研究法』という書籍は、「山村生活調査項目」の項目の筆写を通して具体的な調査のあり方と関連付けられ、理論と実践とが照応できるような読みへと開かれていったのである。

すでに述べたように、櫻井が一九四四年に文理大に提出した卒業論文の題目は「報恩思想成立史試論」。審査にあたったのは肥後和男と村岡典嗣。日本人にとっての恩関係を調べるには、民衆の生活自体を見なければいけないのではないか、支配者層だけを見てはいけなさと考えた櫻井は、そのための方法を模索する。その点で柳田は「上から下を見るのではなく、下から上を見る、横から周囲を見るといったような発想で学問をやっている。こうでなくてはならないと、先生に教えを受けたいと思ってたわけです」と櫻井は回想している〔櫻井 二〇〇三 二四〕。「爾後の学問間にコペルニクスの転換をもたらしたともいえる『国史と民俗学』の一冊を発見した」のもこの時期だった〔櫻井 一九八七 二一〕。とはいえその浩瀚な卒業論文では、柳田国男の著作の引用は一箇所だけにとどまった。第一章本文の「『お返し』の習俗については民俗学者によつて多くの報告が発表されてゐるが」という箇所への注がそれで、注を見ると柳田の『民間伝承論』と井上頼寿の『京都民俗志』が文献として示されているに過ぎない。この時点ではまだ櫻井は、柳田と直接の面識を得るまでには至っていなかった。

文理大での民俗学の動向を見ると、一九四〇年の第二回民俗研究会報告が『史潮』彙報に掲載されて以後、同誌には研究会についての活動記録がない。それは会の中心を担っていた和歌森太郎が一九三九年一二月

に現役兵として入営して中国に派遣され、翌年九月に現役免除となって帰還するまで大学を不在にしていたこと〔和歌森太郎著作集刊行委員会 一九八三 二〇二〕、入れ代るように今度は肥後が一九四一年七月から翌年四月まで兵役にあったことが影響していた。戦時下の制約によって研究会活動自体、継続が困難になっていた。さらに千葉徳爾は一九三九年に東京高師を卒業後、宮崎県立宮崎中学校教諭となるものの、そのまま一月には召集を受けて現役兵として入隊し中国大陸を転戦する〔千葉 二〇〇六 三一八〕。戦後もソビエト軍に抑留されて、帰国は一九四七年のこととなった。文理大在学中から「民間伝承の会」に入会していた直江広治は卒業後、北京の日本中学校教諭として赴任し日本を離れると一九四六年まで帰国することはなかった〔北見 一九八二 五〕。民俗学へ関心を持つ若手は、戦時下にあつて四散せざるを得ない状況にあった。

櫻井が東京高師に入学すると桐花寮に入寮したことはすでに述べた。国史学を学ぼうとする者同士の部屋の間は、大塚地理学会に所属する者たちの部屋となっていた。千葉はその寮に四年までおり、地理学での顔役になっていったという。とはいえこの時期、櫻井は千葉と面識はあったものの、学問論を戦わすことはなかった。さらに文理大に進学してからも、千葉や直江と交流して民俗学への関心を深めることはなかったと回顧する。それは戦局が悪化する当時の状況からいっても不可能だった。文理大での研究会が大きな実を結ぶ機会は、ここに失われていく。櫻井自身、召集されることはなかったとはいえ、空襲によつてその蔵書の多くを焼失して敗戦を迎える。そして柳田のもとに櫻井が挨拶に行ったのは、戦後しばらく経た一九四七年のこととなった〔櫻井 二〇〇三 二五〕。

## 最後に

昭和戦前期にあって柳田国男の著作がどのように受容されていたのか、という問題を櫻井徳太郎文庫の蔵書および櫻井徳太郎氏への聞き取り、さらに当時の読書をめぐる社会的状況を通じて本論文は論じてきた。

櫻井が高田師範に入学した時期は、郷土教育運動が次第に高揚しつつあった時期と重なる。しかし高田師範在学中に櫻井は柳田の著作に接することはなかった。高田師範で郷土教育の展開に大きな役割を果たしていたのが、高田地理研究会であったことからわかるように、そこでの郷土教育は地理学的方法に根ざしたものだ。高田師範の図書館での蔵書を見ても柳田の著作の数はわずかであり、柳田の著作へ触れる回路自体がきわめて限定されていたというのが実情だった。

櫻井は東京高師に入学した一九三八年、柳田の『郷土生活の研究法』を入手して目を通していている。とはいえ周囲で柳田の著作に親しむような生徒は、いなかったのが実情だった。教養主義が主流だったこの当時の調査結果をまとめた『学生生徒生活調査』の項、「最近読みて感銘を受けたる書籍」での回答には柳田の著作は皆無であり、さらにいえば思想善導という脈絡にも無縁だった。櫻井のこの時期の読書傾向も、やはり教養主義的な色合いが強い。そうした読書を支えていったのが、新書形式の書籍の登場だった。その一方、入学後に肥後和男の影響で関心を持つようになった歴史学の分野へも次第に傾倒していく。肥後の師、西田直二郎の『日本文化史序説』は櫻井だけではなく、東京高師、文理大の生徒学生に広く読まれていた。しかし民俗学的方法に強い関心を寄せていた西田の著作を通じて、さらに柳田の著作へと櫻井の読書が展開して

いったわけではない。まだこの時点では、柳田とは啓蒙家であり、アカデミズムに属する研究者ではないというのが櫻井の認識だった。

一九四二年に文理大に進学した櫻井は、一年の春休みの旅行中に柳田の『日本の祭』に目を通す。これが柳田の著作を読んだという明確な認識を持った最初となった。当時、若手の歴史学研究者の間では民俗学に対して独自の学問領域とする見方もあった。しかし歴史学界全般を見れば、民俗学、そして柳田の評価は高いものではなかったのもたしかである。文理大図書館での柳田著作の所蔵状況にも、それは反映されていた。その一方で文理大には肥後和男や和歌森太郎らによって民俗学研究会が誕生していく。櫻井自身はこの研究会に関わることはなかったものの、次第に柳田の著作に関心を向けるようになっていった。とりわけ『国史と民俗学』を発見したのが、この時期だった。しかし戦局が押し詰まり、文理大の民俗学研究会も活動が沈滞していく。櫻井にしても柳田と実際に面識を得るようになったのは、戦後のこととなった。

櫻井徳太郎文庫に所蔵された柳田の著作を見ると、昭和二〇年代に集中的に刊行されていたことがわかる。柳田国男の著作の受容という点では、戦後の時点が一つのエポックとなるのかもしれない。アカデミズムでの受容という点も含めて、今後の課題となろう。

(1) 民俗学者を対象とした蔵書研究として、柳田国男の洋書の所蔵状況を通してその学問形成について論じた高橋治の論文がある〔高橋 二〇〇〇〕。

(2) 櫻井徳太郎文庫所蔵の蔵書の入手時期に関して、当初、櫻井の蔵書を示すスタンプや実印の種類によって、大まかな時期を判断できるものと考えていた。しかし櫻井に聞き取りを行ったところ、入手と同時に

押印するだけでなく、既に入手したものに後で押印をするようにもしていたとの事だった。実際、その蔵書の多くには一冊の書籍に複数のスタンプ、実印などが押印されている。したがってこの種の押印の有無によって、入手時期の推定はできないことになる。

(3) その経歴は以下、『櫻井徳太郎先生 年譜・著作目録』（櫻井徳太郎先生古希記念会 一九八七）によった。

(4) 小田内の経歴は以下、山崎準二（山崎 一九八三）、外池智（外池 二〇〇四）によった。

(5) その終刊号は確定できていないが、上越市立図書館での所蔵は第三巻第一号まで、新潟大学附属図書館では一九三八年の第三巻第二号までとなっている。仮にこの年に終刊ということになれば、『越佐教育』誌上で郷土教育関連の記事掲載が終息するのと、ほぼ軌を一にしていたことになる。

(6) 櫻井はこの年度ではまだ三年生であり、会員名簿にその名前は見当たらない。なお一九三一年に師範学校規定が改正された後の時点では、本科の第一部と第二部の違いは以下の通りとなる。第一部の入学資格は高等小学校第二学年修了程度で、修業年限は五年。第二部の入学資格は中学・高等女学校卒業程度で、修業年限は二年。さらに本科卒業後またはこれと同等以上の学力を有するものを入学資格とし、修業年限一年の専攻科が設置されていた。

(7) 高田師範での蔵書の目録は冊子体、カード式共に存在しておらず、作成されたかどうか不明である。戦後、新潟大学に管理換えされた図書に関しては、カード目録が作成されたが、教育学部分館時代のそれは近年の国立大学法人移行にあたって財産目録作成の資料として利用された後、焼却処分となった。また教育学部分館時代に作成された帳簿は、一九八一年のキャンパスの統合移転の前後に行方不明となった。以上の

状況については、新潟大学附属図書館の栗原道夫氏にご教示いただいた。

(8) 注(7)で述べた新潟大学附属図書館の場合を見るまでもなく、戦後、国立大学の母胎となった旧師範学校の蔵書状況を現在、確認することは極めて困難になっている。また戦前、冊子体の図書目録を刊行していた師範学校図書館も極めて限られていて、柳田の著作の所蔵状況について全国的動向を把握するのは難しい。師範学校図書館の冊子体目録は管見の範囲では、一九三一年に発行された『愛媛県師範学校図書館図書目録』に限られた。これは「昭和五年十一月末現在」と表紙にあるように、郷土教育運動が大きく展開される直前の時点のものであり、柳田の著作の所蔵状況を見るにはあまり適切ではない。とはいえその目録にある総冊数二万二千点弱から柳田の著作を拾い出すと、わずかに「第五類一般論文、随筆集」の項に収録の『朝日常識講座第六巻 都市と農村』一点に限られる。

(9) 各教室のスタッフについては『東京文理科大学閉学記念誌』（東京文理科大学 一九五五）によった。

(10) 以下、肥後の経歴については『肥後和男歴史学を考える』（芳賀 一九九三）によった。

(11) 民俗学学史の上で京都はどのように位置づけられるのかという点については、『柳田国男研究論集』第4号で「京都で読む柳田国男」として特集が組まれている。戦前について言えば、菊地暁は京都大学所蔵資料から京大民俗学会の参加者リストと研究会一覧を作成しており、当時の多様な人的交流と幅広い問題関心の所在を浮かび上がらせている〔菊地 二〇〇五〕。また西田直二郎については、同誌に林淳の「文化史学と民俗学」が掲載されており、参照されたい〔林 二〇〇五〕。東京文理科大学あるいは東京教育大学出身の民俗学者に及ぼした京都の直接

的間接的影響は、今後検討されるべき課題となろう。

(12) 一九三七年分以降、章ごとにあつた当該分野動向についての文章がなくなり、たんなる文献目録へとその体裁が改められた。

(13) 先の引用の五年後、『昭和九年の国史学界』の「民俗学」の章を引用したい。「昭和九年度を飾る民俗学上の好著は、柳田国男氏の『民間伝承論』である。氏は我国に於ける本学問の樹立者といふべく、其の功績は永遠に没しない」と、まず柳田への賛辞の言葉が置かれる。さらにこの書を通じて、評者は「此の学問の最近の成長変化が極めてめまぐるしかつた」ことを感じたという。そのため「確固たる骨組が出来上つてゐないのが此の学問の現況ではあるまいか」と危惧を述べて、「民俗学の将来は歴史学の有力なる補助学として相協力して進むべきところに意義があると思ふ」と今後へ向けた示唆をした(代々木会 一九三五 五一・五二)。学としての認知を前提として、さらに民俗学を歴史学とどのように関連付けるか、という点にまで踏み込んだ言及だ。

(14) 『国史と民俗学』が刊行されたのは一九四四年だが、櫻井徳太郎文庫所蔵のものは戦後、一九四八年発行のものである。櫻井によれば文壇大時代、同書を神田の古書店で求めて以後、座右においていたが、戦災によって消失してしまい、現在残されているのは戦後あらためて購入したものだという。

明石要一 一九八一 「昭和初期師範生の生活史」石戸谷哲夫他編『日本

教員社会史研究』垂紀書房

伊藤純郎 一九九八 『郷土教育運動の研究』思文閣出版

今村義孝 一九三二 「郷土・地理研究会設立に就て」『郷土・地理研

究』創刊号

鹿野政直 二〇〇六 『岩波新書の歴史』岩波書店

菊地暁 二〇〇五 「主な登場人物 京都で柳田国男と民俗学を考えて

みる」『柳田国男研究論集』第4号

木代修一 一九六一 『六十年のあゆみ』木代修一教授出版記念会

北見俊夫 一九八二 「直江広治教授と民俗学」『歴史人類』第10号

櫻井徳太郎 一九八七 『伝承の相貌 民俗学四十年』吉川弘文館

櫻井徳太郎 二〇〇二 「忘れえぬ深き学恩」『務台理作著作集第8巻』

「月報」こぶし書房

櫻井徳太郎 二〇〇三 『私説柳田国男』吉川弘文館

櫻井徳太郎先生古希記念会 一九八七 『櫻井徳太郎先生 年譜・著作

目録』

櫻井徳太郎・芳賀幸四郎他 一九九三 「座談会 肥後和男先生の思い

出」芳賀登編監修『肥後和男歴史学を考える』教育図書センター

蘇理剛志 二〇〇一 「京都帝国大学民俗学会について」『京都民俗』

一九

中村吉治 一九八八 『社会史への歩み二 学界五十年』刀水書房

日本育英会 一九六四 『日本育英会二十年記念誌』日本育英会

高橋治 二〇〇〇 「柳田国男の洋書体験 一九〇〇・一九三〇」柳田

国男研究会『柳田国男・民俗の記述』岩田書院

千葉徳爾 二〇〇六 「千葉徳爾略年譜」『新考山の人生』古今書院

筒井清忠 一九九五 『日本型「教養」の運命』岩波書店

東京文理科大学 一九五五 『東京文理科大学閉学記念誌』東京文理科

大学

外池智 二〇〇四 『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する

研究』NSK出版

野村典彦 二〇〇六 「名所の決別としての『木思石語』」『口承文芸研

- 究』第二九号
- 芳賀登 一九九三 「肥後和男の学問」『肥後和男歴史学を考える』教育出版センター
- 林淳 二〇〇五 「文化史学と民俗学」『柳田国男研究論集』第4号
- 肥後和男 一九三八 『日本神話研究』河出書房
- 肥後和男 一九七八 「助教教授当時の和歌森君」『和歌森太郎』『和歌森太郎』刊行会
- 平山和彦 一九九九 「郷土教育」『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館
- 前島康男 一九八二 「師範教育の『地方化・実際化』に関する一研究」『東京大学教育学部教育行政学研究室紀要』第3号
- 牧口常三郎 一九六五 『教授の統合中心としての郷土科研究』『牧口常三郎全集第五卷』東西哲学書院
- 宮原兎一 一九六七 「郷土教育研究史序説」『東京教育大学教育学部紀要』第13巻
- 文部省教学局 刊行年記載なし 『学生生徒生活調査（下）昭和十三年十一月調査』教学局
- 山崎準二 一九八三 「小田内通敏の経歴と著作・関係文献目録」『静岡大学教育学部研究報告人文・社会科学篇』第34号
- 代々木会 一九三〇 『昭和四年の国史学界』筑波研究部
- 代々木会 一九三五 『昭和九年の国史学界』筑波研究部
- 和歌森太郎著作集刊行委員会 一九八三 「和歌森太郎年譜・著作」『和歌森太郎著作集別巻』弘文堂

本論文作成にあたって聞き取りに快く応じてくださった櫻井徳太郎先生  
および、蔵書閲覧に際して便宜を図っていただいた板橋区公文書館には  
深く感謝する次第である。なお櫻井先生は平成一九年八月に鬼籍に入ら  
れた。脱稿した段階で先生に目をお通しただけのもの、残念ながら  
活字となったものはお目にかけることはできなかった。謹んで先生のご  
冥福を祈りたい。